IMS12 報告　日本大学英文学会「英文学会通信」第 112 号（2019 年 11 月）

The 12th International Milton Symposium (第 12 回国際ミルトン学会) 発表報告

日本大学文理学部英文学科教授　野呂有子
松山大学経営学部経営学科特任講師　金子千香

2019 年 6 月 17 日～21 日にフランス、ストラスブール大学で開催された The 12th International Milton Symposium（以下 IMS12）に参加し、発表を行ってまいりました。野呂と金子は 15 日（土）朝に日本を立ち、23 日（日）朝に帰国いたしました。日本大学英文学会会員としては他に埼玉医科大学講師の上滝圭介先生と、日本大学文学研究科英文学専攻博士後期課程 1 年在学の天海希菜さんが参加されました。さらに、天海さんの妹さん、絵菜さんも同行されました。

上滝先生は、イギリス、リバプール大学での研修の直前というタイミングで参加なさいました。天海さんは留学希望をお持ちのため、野呂と長い共同研究歴を持つ、クリストフ・トルヌー教授（今回の国際学会のオーガナイザー）に留学受け入れの可能性を打診する目的もありました。（その後、天海さんのストラスブール大学への留学が決定し、2020 年春に出立いたします。）また、絵菜さんはこの 9 月から、チェコにあるニューヨーク大学プラハ校に進学されますが、そのウォーミングアップも兼ねての旅となりました。

ストラスブールはグーテンベルグが活版印刷術を完成させた場所で、ここから世界中にすぐれた文学作品が広まった文学に所縁のある街です。大聖堂を仰ぎつつライン川の支流が豊かに流れる街にはグーテンベルグやゲーテなどの数々の彫像がありギリシア・ローマ神話のモチーフが横溢し、街そのものが芸術作品のよう。またフランスとドイツの国境に接し時代ごとにいずれかの支配下に置かれ、各文化の十字路として栄えてきました。現在では EU の首都主要機関である欧州議会の開催地としてその重要度は計り知れません。

同時に 17 世紀英国の叙事詩人であるジョン・ミルトン（1608-74）の国際学会がフランスで開催されたことには極めて大きな意味が見出せます。ミルトンは著書 *Pro Populo Anglicano Defensio*（『イングランド国民のための弁護論』; 1651 年出版、当時の国際共通語ラテン語で執筆）によって近代民主主義精神の理論的基盤を確立させた先駆者のひとりです。ちなみに本書は、新井明・野呂有子共訳『イングランド国民のための第一弁護論および第二弁護論』として聖学院大学出版会から 2002 年に邦訳が出版されています。本研究ウェブサイトの「Miscellanea 著書訳書等の紹介」に『イ

ングランド国民のための第一弁護論および第二弁護論』の更なる書誌情報等が掲載されているので参照されれば幸いである。

また、本ホームページ、野呂有子の研究ウェブサイトには、本書のラテン語原著のラテン語版英語対応コンコーダンス、*Pro Populo Anglicano Defensio* ラテン語原典電子版テキスト、*Pro Populo Anglicano Defensio Secunda*（『イングランド国民のための第二弁護論』）ラテン語原典電子版テキストが搭載されています。

詳細は、電子版テキスト『イングランド国民のための第二弁護論』に付された電子ブック版『第二弁護論』「まえがき」の特に２：ジョン・ミルトンとラテン語論文『第一弁論』及び『第二弁護論』の概要以下を参照してください。ミルトンが『イングランド国民のための第一弁護論』および『第二弁護論』を執筆するに至った、17 世紀英国の情勢、およびヨーロッパの国際情勢についての経緯が書かれています。是非、読ください。

ミルトンがその筆をもって支えた共和政府は、1660 年の王政復古によって崩壊しましたが、フランス革命初期にミラボー〔Honoré-Gabriel Riqueti Mirabeau；1749 - 91〕によって、ラテン語からフランス語に翻訳された『イングランド国民のための弁護論』が、フランス革命初期の理論的支柱となったことは、IMS12 のオーガナイザーであるクリストフ・トルヌー教授や野呂が過去の論文で指摘してきたところです。

シンポジウム会場となったのは、かつては王侯・貴族の居城だったことを彷彿とさせる、Palais Universitair de Strasbourg（私たちはパレユニベルシテと呼んでいました）です。一階正面階段をあがりレセプションコーナーで参加確認手続きを行いましたが、その向こうは二段ほど下がった大広間になっています。フランス革命前には、ここで着飾った貴婦人や貴族たちが華麗な円舞を繰り広げたのか、と思わず過去の栄華に思いを馳せてしまいます。現在、大広間は入学式や卒業式などに使用されているようです。学会最終日には、広間にきちんと幾多もの椅子が並べられていましたが、卒業式のためと聞きましたから。パレユニベルシテは、Faculté des Arts de Strasbourg-Departement Arts visuels 〔ストラスブール大学文芸学部芸術学部とでも訳すべきでしょうか（日本語の「視覚芸術」よりはやや広い意味か？)〕に所属する建物です。

IMS では、今回に限らず、つねに使用言語はすべて英語です。ちなみに金子氏の発表英語原稿は、野呂が加筆訂正させていただきました。また今回、野呂の英語原稿は native check は行いませんでした。が、十分通じたようで新たな自信に繋がりました。本国際学会では、通常、session が六つ同時開催され、五日間で合計 56 のセッションが行われました。各セッションは通常三名のパネリストで構成され、合計で約 150 名

の Miltonists（ミルトン研究者）が集いました。セッションは朝 8 時半から始まり、昼食は美味しいフランス料理をいただきながら、歓談を楽しみつつ 2 時間かけてたっぷりと心身に栄養を補い、午後のセッションは 18 時まで続きます。その後、レセプションや大聖堂観光、エクスカーション（私たちは聖オディール山・修道院へ）、イル川クルーズ、教会コンサート、ガラ・ランチ（昼食に 2 ～3 時間かけて、豪華で繊細なフレンチのコースを堪能！）など、連日の親睦会（ソーシアル・プログラム）でストラスブールを満喫しました。（日本より緯度が高く 22 時でもまだ明るいので、セッションが終わっても一日の活動は終わりません。そして活動時間の長さからも西欧の方のヴァイタリティの強さを感じます。）

さて、私たちの発表は次のようなセッションで行われました。プログラム順にご紹介します。

金 子 千 香
19 日　午前 8 時半～9 時 45 分　Panel Session 6 c
パネルタイトルは Milton's Early Poetry（1624－42）
一番手、金子の発表タイトルは Milton as *Phoebicolis*, a Follower of Phoebus
二番手は、Christopher D'Addario 氏
タイトルは Milton on 12 November 1642: or, How Close Is Too Close?

野 呂 有 子
20 日　午後 4 時 15 分～6 時　Panel Session 9b
パネルタイトルは Value, Prayer, and Justification in *PL*
一番手は、Ryan Netzley 氏
タイトルは Unlearning Value: Speculative Praise and Destructive Creation in *PL*（*Paradise Lost* の略称）
略称）
二番手、野呂の発表タイトルは From *Eikonoklastes* to *PL*: Milton's Concept of Prayer
三番手は、Claude N. Stulting 氏
タイトルは Adoption and Deification: Human-kind's Telos in *PL, De Doctrina Christiana*, and the Greek Fathers

金子氏のセッション会場は、ストラスブール大学で教鞭を執った微生物学者パスツールの名を冠した大教室。堅牢な石造りの建築のうえ、4 ～ 5 m はあろうかという天井のおかげか、発表の声はマイクを使わずとも朗々と響きわたりました。今回は Phoebus を言祝ぐミルトンに焦点をしぼり、とくにラテン語詩「父へ」「マンソウ」「ダモンの墓碑銘」にとりくみました。

ちょうど結論部にさしかかったところでは、今回の発表と今後の研究を盛りたてるファンファーレであるかのように、ストラスブール大聖堂の鐘の音が開いた窓から届きました。気鋭の若手から大御所の先生までがお運びくださり、質疑応答やその後のやりとりからたくさんの恩恵をえました。

（※ここまでの文章は、同行の上滝圭介氏と天海希菜氏にチェックをお願いした。また、一部、上滝氏の加筆が入っていることも申し添えて、お二人に感謝の意を表する。）

また、以下野呂の発表等に関しては、金子氏のことばをそのままここに掲載させていただくものとします。（文責は野呂。内容チェックも野呂が行い、場合によっては多少の修正を入れさせていただいていることをご了解ください。）

野呂先生のご発表は『十七世紀の革命／革命の十七世紀』掲載のご高論「『偶像破壊者』から『楽園の喪失』へ：祈りの問題を中心として」を土台としつつも、今回は口頭発表ということを考慮されパワーポイントを用いて、視覚資料を中心に論じられている点で新しいものとなっていました。加えてストラスブール出身のギュスターヴ・ドレ（1832－83）の挿絵がミルトンの「祈り」の主題を如実に描き出していることを明らかにしたのです。さらにこの挿絵が 1903 年通俗世界文学の第一巻として満を持して出版された繁野天来訳『失樂園物語』に掲載されていることを指摘しました。ストラスブールと日本の名匠が 100 年以上も前にミルトンを通じて繋がっていたことをここに知らしめ、学会開催の地への敬意と二つの国の絆を結論となさったのです。

さらに野呂先生はセッション Problems in Adapting *PL* にて司会（チェア）を務められました。司会（チェア）は聴衆（オーディエンス）の意見を引き出しつつ各発表者の主張をまとめるのが仕事です。例えば、野呂先生は 20 世紀の映画 *Westworld* における *PL* の受容と 18 世紀から現代の文学批評史における *PL* の通史的受容をテーマにした発表を「この二つの発表を同時に聞くことで私たちは *PL* を内容（うちも）と構造（そと）から理解することができた」とおまとめになりました。いっけんあまり共通項を持たないかのように見えるこれらの発表を「内なるもの・外なるもの」というミルトン研究の主要テーマを用いてご説明されたのです。セッションの参加者は 30〜40 代の新進気鋭の男性研究者ばかりでしたが、その解釈に彼らが満場一致で納得し、そして発表者がとても満ち足りて心地よさそうにしているのをみると、野呂先生が司会（チェア）として国際的な場面でも通用する質の高いパフォーマンスをなさったのだとわかりました。

今回、日本人で国際学会に参加したのは計六名でした。残り二名は、元青山学院大

学教授佐野弘子氏と元大手前学院大学教授森道子氏で、お二人ともご発表をなさいました。従って、今回の国際学会の日本人発表者四名すべてが女性であり、日本人女性 Miltonists の意気軒高なさまを国際的にアピールする結果となりました。

また、日本人 Miltonists 六名のうち四名が野呂先生とその教え子であったということは、野呂先生が国際的に活躍する日本人屈指の研究者で、次世代の Miltonist を育てる「教え上手な」教育者でもあることを示していると言えます。そして先生は旅先で見聞きするもの一つひとつを教材として私たちの知識を養い、ご自身が手本となり私たちの国際感覚を養ってくださいました。先生が IMS で認められていればこそ（“My supervisor is Professor Yuko Noro”といえば皆さん納得されます)、その指導を仰ぐ新参者たちも世界的な Miltonist の輪に温かく迎えていただくことができました。恩師と兄弟（あに）・姉妹（いもうと）弟子とともに国際学会に参加できたことで、一人で参加した場合よりもはるかに豊かな学びと喜びを得たことと思います。そしてともに研究の喜びを共有しあえる方々とのご縁に感謝せずにはいられません。

最後になりますがこのような経験に至りましたのも本学英文学科にて研究者の卵として立たせていただき、ここでご縁を結べたからできたこととあらためて感謝申し上げます。

パレ・ユニベルシテ（ストラスブール大学の学部の建物）を背景に、上滝圭介氏と野呂。背後の人々は、IMS12 の participants。撮影者は金子千香さん。もとはお城（palais＝palace）であったことが納得される宮殿の豪華な佇まい。

第 12 回国際ミルトン学会　野呂発表風景その１。撮影者は上滝氏。

第 12 回国際ミルトン学会　野呂発表風景その２。撮影者は上滝氏。

第 12 回国際ミルトン学会　金子さん発表風景　隣は、本セッション司会の Edward Jones 氏　Jones 氏は *Milton Quarterly* 編集主幹。撮影者は野呂。

第 12 回国際ミルトン学会　ガラ・パーティーにて　Anne Boyd 氏（国際的 Miltonist, Professor John Leonard の奥様）と野呂。カナダでは夫婦別姓だとアンさんから伺いました。

宿泊先ホテル、リージェンツから、学会会場であるパレユニベルシテドゥストラスブールまで（徒歩 5 分ほど）行く途中にある教会、Église Réformée Saint Paul（改革派聖パウロ教会）の前で。左から上滝氏、野呂、金子さん、天海さん。撮影者は、ミルトン作『ラドロー城の仮面劇』を中心に論じた名著 *Lady in the Labirinth* 等で国際的に高名な、William Shrllenburger 教授。

ホテル・リージェンツの一室にて。左から天海絵菜さん、希菜さん、野呂、金子さん。撮影者は上滝氏。野呂が手にしているのは、四人から贈られたレース編みの「幸福の青い鳥」。